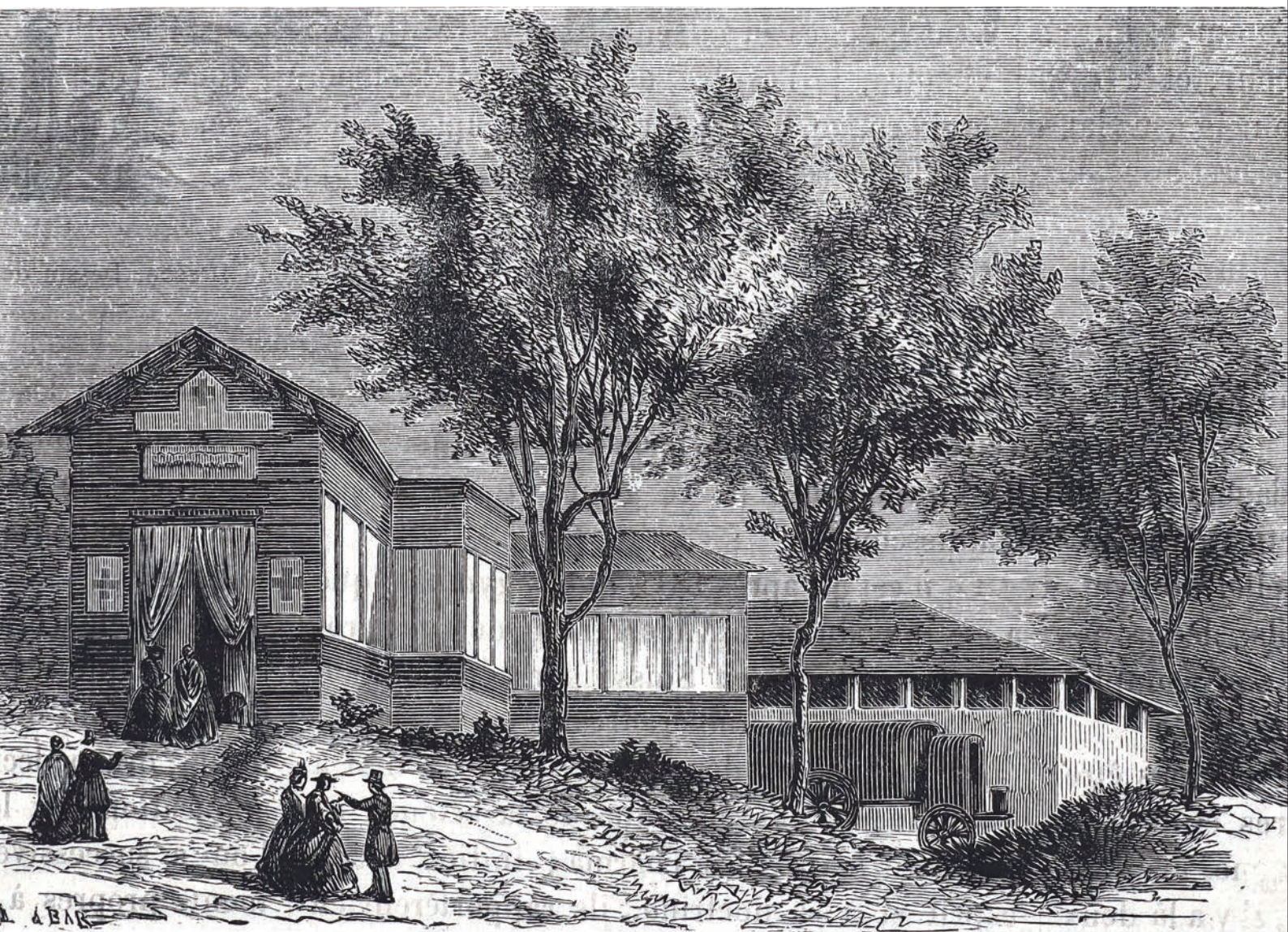


企画展

万博と赤十字

日赤発祥の原点は万博にあり



"L'Exposition universelle de 1867 : illustrée" より赤十字パビリオン外観

期間：2025年7月5日（土）～10月13日（月・祝）

主催：日本赤十字社、赤十字国際委員会（ICRC）駐日代表部

人道の港 敦賀ムゼウム

※人道の港敦賀ムゼウムで開催する企画展「万博と赤十字」については、
日本赤十字社福井県支部と人道の港敦賀ムゼウムが共催しています。

万博と赤十字

日赤発祥の原点は万博にあり

幕末の1867(慶応3)年、パリ市街にちょんまげ帯刀姿の日本人の一行が現れました。彼らが向かった先は、第2回パリ万国博覧会の会場。現在のシャン・ド・マルス公園の広大な敷地で、当時はまだエッフェル塔はありませんでした。ヨーロッパ各国の王や諸侯をはじめ、要人や商人が集うこの地に、世界の最先端技術や文化が展示されました。中には、スイスで誕生したばかりの赤十字のパビリオンもあり、赤十字と日本人の運命の出会いの場となります。赤十字の生みの親であるアンリー・デュナンも万博会場を訪れていましたので、日本人の一行とすれ違ったかも知れません。その6年後の1873(明治6)年には、明治政府の代表団がウィーン万国博覧会に日本館を設置しました。現在のウィーンの中心部にあたるプラーター公園で、ドナウ川に沿った横長の広大な地にヨーロッパ各国が最先端の展示を行ったのです。中には、軍装備や負傷兵救護のための病院列車や救急車も展示されました。オーストリア、フランス、イタリア、イギリス、ベルギーなどが展示した器材や乗り物の多くには、赤十字マークが付されたので、会場のあらゆる場所に赤十字パビリオンが設けられたように見えるほどでした。日本を含む世界中から万博会場を訪れた人々は、赤十字が数年の間に各国に広がり、発展を遂げた様子を目の当たりにしたのです。幕末から明治にかけて、パリやウィーンを訪れた日本人が、日本に赤十字をもたらすまでにいったい何があったのか。日本赤十字社発祥の原点をふり返ります。



※赤十字WEBミュージアムより引用



※赤十字WEBミュージアムより引用



<https://www.jrc.or.jp/webmuseum/column/expo/>

戦後80年展

敦賀空襲を伝えつなぐ



昭和16年(1941)12月8日に開戦した太平洋戦争は、17年(1942)6月のミッドウェー海戦での敗北、18年(1943)2月のガダルカナル島からの撤退により、日本周辺の制空権・制海権は次第に失われ、昭和19年(1944)8月、マリアナ諸島がアメリカ軍に占領され、本土空襲が激化していきます。

太平洋側主要都市への空襲によって軍関係の施設が移転され、さながら軍需基地のようになった戦争末期の

敦賀において、それでも人々は「こんな小さな港町に空襲はないだろう」との意識がありました。

昭和20年(1945)7月12日の夜、敦賀は日本海側沿岸都市としては初めての上空襲に遭います。

死者・負傷者あわせて三百人以上、港を中心とする市街地の大半が焼け野原となった80年前の現実を、私達はどこまで実感できるのでしょうか。そして私たちにとって80年前の出来事は、今もなお世界のどこかの現実となっています。

戦後80年の節目に、敦賀と戦争に関する資料を展示します。

敦賀市立博物館でも同時開催します

